

## 〈修道女になる前に〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

一九六二年のポーランド。修道院で戦争孤児として育てられたユダヤ人の年若い尼僧の四日間の自分探しの旅の物語。

見習い尼僧アンナ（アガタ・チュシェブホフスカ）は、ある日院長に呼ばれ、天涯孤独だと思っていた自分に叔母がいることを告げられる。ただ一人の親戚なのに一度も会いに來ない叔母に興味をもち、院長の勧めに従い会いに行くことにする。

白黒の静謐なスタンダード画面。初めて修道院の外の世界の雑踏に立ったアンナは、臆せず教えられた住所を探し当てる。初めて会う叔母ヴァンダ（アガタ・クレシヤ）は、開口一番「あなたはユダヤ人なのよ。本名はイーダ」と告げる。戸惑うアンナをよそに気ぜわしく煙草を口にするヴァンダは、検察官を務める勝気な女性だ。寝室には男がおり、アルコールとセックスに溺れている様子なのは、何か胸の奥の辛い記憶から逃れられない

からなのか。イーダは浮かぬ思いで帰って行くが、ヴァンダは駅の待合室にイーダを探しに來て、再び自宅へ連れ帰る。

初めて母の写真を見て墓に参りたいというイーダに、ヴァンダは「第二次世界大戦で死んだユダヤ人の墓は存在せず、遺体のあった場所はわからない」と答え、代わりにイーダの両親が住んでいた家に行ってみようと誘う。だが、行ってみるとその家の住人は、ユダヤ人のことなど知らないという。押し問答の末、その家の主人が二人を森の中のある場所に案内し、土中深くから掘り出したものは…。イーダにとってあまりにも衝撃の事実が次々に現れる。

ポーランドは昔から多くの音楽家や文学者、科学者などの出た文化的な国で、歴史的に周辺の強国から痛めつけられた被害者でかわいそうな国、というイメージが強い。そうでもあるが、必ずしもそうばかりでもない。例えば、確かに

にナチス・ドイツは一九三九年九月にポーランドに攻め込み、第二次世界大戦が始まった。ナチスはポーランド国内のユダヤ人を強制収容所に集めて虐殺した。これも事実である。だがまたナチス占領に乗じて国内のユダヤ人を虐殺したポーランド人もいたのである。戦後は逆に、戦争を生き延びたユダヤ人の中には熱心なスターリン主義者になり、そうしたポーランド人を過酷に裁く側に立った者も…という複雑な政治的民族的国内問題を抱えている。一九六二年という時代設定にも、綿密な歴史の意味が潜ませられている。

だが、これは歴史の教科書ではない。一人の無垢な少女が人との出会いを通して自国の歴史や現実を知り、自分で人生を選択する大人の女性へと成長してゆく。初めて好ましい青年と一夜を共にするが、海辺の町で結婚、出産、犬を飼う家を建てるのが自分の夢ではないことをベッドで確認するのだ。

かつてユダヤ人の身元を隠して育ててもらった修道院で、今はユダヤ人修道女として生きる道を選んで戻っていくイーダ。長い一本道を歩いて來る姿は、名作「第三の男」のラストシーンさながら。あのアリダ・ヴァリの決然たるハイヒールの音はないけれど。

## 『イーダ』

ポーランド・デンマーク合作映画 (80分)

監督：パヴェウ・パブリコフスキ

出演：アガタ・チュシェブホフスカ、アガタ・クレシヤ

8月2日より、渋谷シアター・イメージフォーラムにて公開

© Phoenix Film Investments and Opus Film

